

## 第9節 考察

### 1. 古市河原田遺跡出土の突帯文土器について - 古市河原田式の提唱 -

#### 1. はじめに

今回の古市河原田遺跡の調査では、8層中から、縄文時代晩期後葉の突帯文土器が出土した。包含層出土資料としては量、質ともにまとまりがあり、山陰地方東部における当該期の土器編年を考えるうえで、重要な位置を占めると思われる。以前、筆者は山陰地方東部の突帯文土器について検討を加え、当該地域の突帯文土器期を3期に分けたことがある<sup>1)</sup>。しかし、十分な量の一括資料がないこと、それに関連して各段階における器種組成が明確でないなどの問題点が今後の課題として残った。古市河原田遺跡出土資料は、器種組成が把握できる点も重要である。そこで、小考では、古市河原田遺跡出土資料の様相を明らかにし、その時間的位置づけを行う。

#### 2. 古市河原田遺跡出土の突帯文土器

本調査で出土した突帯文土器の出土状況については、本文中でも述べたが、調査区1・2区、特に1区北側で8層中から集中的に出土する傾向にあった。平面的にはいくつかのまとまりがあるが、このことは出土資料の型式差には反映していない。また、8層は分層可能であったが、平面的には分離できなかったり、出土する土器の形態にも差が認められなかった。8層中における土器の出土状況に間断は認められず、集中度が高かった。こうしたことから、これらは細かな出土位置、層位に関わらず、一括資料として扱う方が適当と思われる。

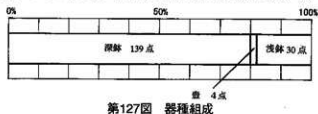
#### a. 深鉢の分類

深鉢の分類は、突帯の位置、形状、刻目の形状など口縁部の属性を中心に行われている<sup>2)</sup>。ここで分析の対象とする資料には口縁部小片が多いことから、その方法を参考に分類を進めたい。分析の対象とした深鉢の総数は139点で、全体の80%にあたる(第127図)。これは8層以外の堆積から出土した資料も加えた数字である。また、以下では場合により、口縁部を欠損するような資料を除外したうえで比率を算出している。

まず、突帯の数で一条突帯文と二条突帯文に大別し、それらを、突帯の刻目の有無から刻目突帯文、無刻目突帯文における。さらに口縁部を刻み、突帯が口縁部から突帯の幅一つ分程度下がった位置につくものをA類、口縁部を刻まずに、突帯が口縁部から突帯の幅一つ分程度下がった位置につくものをB類、突帯が口縁部にほぼ接する位置につくC類、突帯が口縁部に接してつくD類、突帯が口縁部から垂れ下がるようにつくE類に細分する(第128・129図)。また、器形は緩やかに括れるものをI類、砲弾形を呈すものをII類とする(第128・129図)。

当遺跡における一条突帯文と二条突帯文の比率は、表1に示した。ほとんど一条突帯文で占められている。ただし、二条突帯文については、口縁部まで残る資料が皆無で、胴部片から数を算出した。そのため、若干の誤差を持っているかもしれないが、全ての胴部片を確認したうえでの数字であるから、ある程度の妥当性は保たれていると思われる。また、二条突帯文には無刻目突帯文が1点認められ、器形についてはいずれもI類である。以下、二条突帯文が稀少なため、一条突帯文深鉢を主体に分析を進める。

先述した分類基準により一条突帯文深鉢は、一条刻目突帯文深鉢がA～Eの5類(第128図)に、一条無刻目突帯文深鉢がB～Dの3類(第129図)の計8



第127図 器種組成

突帯	刻目の有無	口縁	点数(%)	点数(%)	点数(%)		
一	刻目	A	21(15)	117(84.5)	135(97.5)		
		B	45(32.5)				
		C	19(14)				
		D	23(16.5)				
		E	3(2)				
		不明	6(4.5)				
	無刻目	B	9(6.5)	18(13)			
		C	2(1.5)				
		D	5(3.5)				
		不明	2(1.5)				
		刻目	3(2)			3(2)	4(2.5)
		無刻目	1(0.5)			1(0.5)	

表1 深鉢各々の比率

	器形Ⅰ類	器形Ⅱ類
A.		
B.		
C.		
D.		
E.		

第128図 一条刻目突帯文深鉢の類型

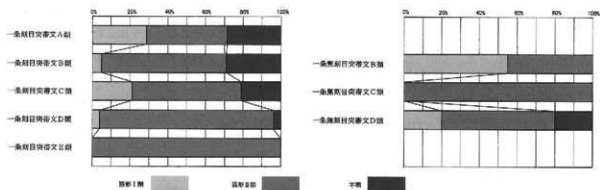
	器形Ⅰ類	器形Ⅱ類
A.		
B.		
C.		
D.		
E.		

第129図 一条無刻目突帯文深鉢の類型

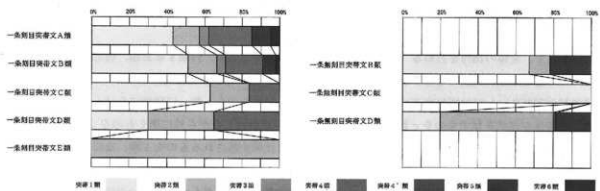
類に分類できる。また、突帯の位置を重視するならば、一条刻目・無刻目突帯文A・B類を突帯が下がった位置につくもの、一条刻目・無刻目突帯文C・D・E類を口縁端部に突帯が接するものとして2大別できる。この比率は前者59%、後者41%である。さらに、二条突帯文、口縁端部を欠損するものも含め刻目、無刻目の比率を算出すると刻目突帯文86.5%（うち一条刻目突帯文84.5%）、無刻目突帯文13.5%（うち一条無刻目突帯文13%）となり、刻目突帯文が過半数を占める（表1）。次に各類にみられる器形、突帯の断面形、刻目の形態についてみていきたい。

各類ごとに認められる器形の比率を示したが第130図である。器形Ⅰ類は刻目突帯文A類で最も多く認められるが、それ以外では少数派である。全ての類を通じて器形Ⅱ類が主体を占める。数は少ないが、一条無刻目突帯文もまた器形Ⅱ類が主体的である。特に、一条刻目突帯文D類、一条無刻目突帯文C類は、ほぼ器形Ⅱ類で占められる。

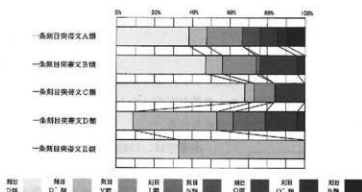
第131図は各類にみられる突帯の断面形の比率である。突帯の断面形は次のように7類に分けられる。断面形が三角形を呈す突帯1類、下さがりの三角形を呈す突帯2類、上向きの三角形を呈す突帯3類、丸形を呈す突帯4類、小さな丸形を呈す突帯4'類、台形を呈す突帯5類、扁平な突帯



第130図 一条突帯文深鉢各類における器形



第131図 一条突帯文深鉢各類における突帯の断面形

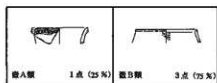


第132図 一条突帯文深鉢各類における刻目

6類である。全体の割合では突帯1類が半数を占める。この突帯1類は一条刻目突帯文、一条無刻目突帯文ともにC類がピークでD類では減少する。逆に一条刻目突帯文A類からD類にかけて突帯2類、4類、無刻目突帯文B類からD類にかけて突帯2類が増加する。また、一条刻目突帯文において突帯3・5・6類は一条刻目突帯文A類をピークに減少し、一条刻目突帯文C・D・E類、一条無刻目突帯文C類には認め

られない。

第132図は一条刻目突帯文各類における刻目の在り方である。刻目は工具および施文方法、刻目の平面形から8類に分類した。ヘラ状工具を押し当てた刻目で、平面形がD字状を呈す刻目D類、小ぶりのD字状を呈すものを刻目D'類。ヘラ状工具で刺したり、切り込んだりした断面V字を呈すものをV類。棒状工具を押し当てたり、上方から差し込んだりしたものをI類。棒状工具で刺突したものをB類。二枚貝によるものをN類。工具は指も含めて多様と思われるが、平面形がO字状を呈すO類、さらに小ぶりなものをO'類とした。全体の傾向としてヘラ状工具による刻目D・D'類が主体的である。一条刻目突帯文A～D類における比率をみると、刻目D類は一条刻目突帯文C類をピークに一条刻目突帯D類では減少する。その一方で、一条刻目突帯文A・B・C類では常に十数%を推移していた刻目D'類が、一条刻目突帯文D類では増加している。刻目V・O・O'類については、細かな増減は認められるが、常に同じような割合を保っている。また、一条刻目突帯文B類に少量存在する刻目I類は、一条刻目突帯文C類には認められないが、一条刻目突帯文D類では増加している。刻目N・B類は少数派で、一条刻目突帯文A類にしか認められない。



第133図 壺の類型

以上の深鉢に認められる器面調整には、ナダ、粗い擦痕の残るナダ、二枚貝による調整またはそれにナダを加えたもの、ケズリがある。磨滅したものが多く、正確な比率を算出することができなかったが、主体を占めるのはナダと粗い擦痕の残るナダのようである。また、二枚貝を使用した調整は一条刻目突帯文A類に多い傾向が認められる。

接合痕の観察できるものに限って言えば、全て内傾接合であった。

#### b. 壺の分類

総数は4点で、全体の2%と少数派である(第127図)。突帯をもつもの、もたないものに大別でき、前者を壺A類、後者を壺B類とする(第133図)。壺A類の突帯断面形は丸形で、D類ないしV類の刻目が施される。口径が小さいことから、壺と判断できたが、基本的な作りは深鉢と共通する。一方、壺B類は口縁部における浅鉢との共通性が強い。

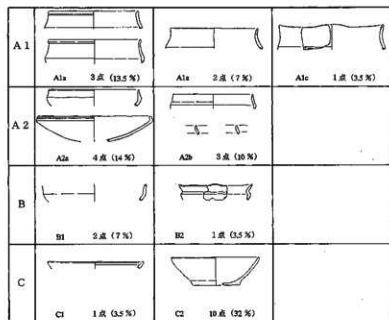
#### c. 浅鉢の分類

総数30点で、全体の18%を占める(第127図)。口縁部が内傾するA類、外傾するB類、碗形・鉢形・皿形を呈すものを一括しC類に大別できる。A類については、口縁部が長い1類、口縁部の短い2類に分け、このうち、口縁端部が肥厚ないし口縁端部直下に沈線が施され玉縁状を呈すものをa類、口縁部になにも施されないものをb類、口縁部が波状を呈すものをc類とした。B類は口縁部が外反しながら外に開くものを1類、「く」字状に屈曲するものを2類とする。さらに、C類は、口縁部内面に沈線が施されるものを1類、なにも施されないものを2類とする(第134図)。

器形を大別した場合、A類が半数を占める。一方、個別に見た場合、最も点数が多いのは、装飾性の低いC2類である。浅鉢全体をみても、平行沈線程度の文様がA1a類、A2a類に認められるものの、明らかに装飾性は乏しい。口縁部も水平なものがほとんどで、波状口縁や、突起が施されているものは僅かに認められるにすぎない。

#### d. 小結

突帯文土器の深鉢において口縁部の変化は重要で、突帯の数、器形の変化も含め、これを重視した研究がこれまでにも行われてきている。山陰地方東部では、口縁端部に刻目が施され、突帯が下がったところにつくものから、口縁端部の刻目の消失、そして突帯が口縁端部に接するという変遷が認められる。



第134図 浅鉢の類型

小考では、口縁部の属性から深鉢をA～E類に分類した。型式学的には、口縁端部に刻目をもち、突帯が下がった位置につくA類が古く、つづいて口縁端部は刻まないが、突帯が下がった位置につくB類、そして口縁端部に接するC、D、E類という前後関係にある。ここでは、まず、A類-B類-C・D・E類という型式学的な序列が、当遺跡においても妥当なものか否か検討してみよう。

そこで、各類と器形、突帯の断面形、刻目などの属性との関係のみてみる。まず、器形であるが、器形I類に対し、砲弾形を呈す器形II類は後出的であることが、近畿地方や中

部瀬戸内地方で指摘されている<sup>3)</sup>。このことは、山陰地方東部においても同様である。このことを考慮するなら、器形Ⅱ類が一条刻目突帯文A類からD類、一条無刻目突帯文B類からD類にかけて増加傾向にあることは型式学的に妥当である。

突帯の断面形は、口縁端部の調整と突帯の貼りつけ方に関係する問題である。つまり、下がった位置に突帯を貼りつける場合には、突帯の上下をナデつけるので、断面形が二等辺三角形(突帯1類)や台形(突帯5類)を呈す場合が多く、口縁に接して貼りつける場合には、口縁端部の調整と突帯の貼りつけが同時処理されることが想定されるため、下さりの三角形(突帯2類)や丸形(突帯4類)が多くなると考えられる。第131図では明瞭な変化を指摘しにくい、概ね、一条刻目突帯文A類からD類にかけて、このような傾向を看取することができる。そういう意味では、口縁端部の調整と突帯の貼りつけが同時に行われる点で、突帯が垂れ下がる一条刻目突帯文B類は後出的である。

また、刻目については、大きく深く施されるものから、小さく浅いものへの変遷が指摘されている。これも第132図からは明瞭な変化を指摘しづらいが、刻目D'類に着目するなら、一条刻目突帯文A～Cでは少ない刻目D'類が、一条刻目突帯文D類では増加していることが明らかである。また、刻目Ⅰ類は一条刻目突帯文D類で増加傾向が認められる。

以上、口縁部の属性による深鉢各々の型式学的新旧は、その他の属性からみても妥当である。しかし、古市河原田遺跡において、これらの深鉢各々が時間的に分離できるか否かは別問題であろう。例えば、この型式学的新旧にある各類=時間差と理解した場合、古市河原田遺跡出土資料は異なる時期の土器が混在しているということになる。一方、これを時間差とみなさない場合、これら一つの様式として理解されなければならない。

結論を先に述べるなら、これらは時間的前後関係にある資料の混在ではなく、型式学的前後関係にあるものがセット関係をなす一様式として理解できると考える。このことについては、当該地域の他の遺跡や周辺地域の遺跡との比較から検討を行いたい。そこで、次に、当該地域における突帯文土器の変遷を概観しておこう。

### 3. 山陰地方東部における突帯文土器の変遷

このことについては以前に述べたことがあるので、ここでは、概略にとどめる。地域は、出雲地域も含め、因幡・伯耆の資料を中心とする。

#### 突帯文Ⅰ期

近畿地方の遊賀里Ⅳ式、中部瀬戸内地方の前池式に相当する段階。鳥取市桂見遺跡自然河川01下層出土資料<sup>4)</sup>がこの段階に相当する。突帯文Ⅰ期の土器がまとめて出土する遺跡は少なく、桂見遺跡自然河川01下層においても浅鉢は伴っていない状況で、器種組成を把握するまで至っていない。出雲では、山間部の頓原町森遺跡<sup>5)</sup>、板屋Ⅲ遺跡<sup>6)</sup>で当該期の資料が多く出土している。深鉢の特徴は、口縁端部は面取りされ刻目が施される。刻目突帯が口縁端部から下がった位置にめぐる。刻目はしっかりと刻まれた刻目D類、O類が多い。器形はⅠ類。調整には二枚貝条痕やナデがみられる。また、桂見遺跡自然河川01下層では、突帯のつかない砲弾形の粗製深鉢が伴う。

#### 突帯文Ⅱ期

近畿地方の船橋式、中部瀬戸内地方では沢田式に相当する。突帯文Ⅰ期に比べ、資料の数は増加するが、良好な一括資料には恵まれない。当該地域の現状では、船橋式・沢田式に先行する近畿地方の山井<sup>7)</sup>、中部瀬戸内では平井氏の大別Ⅱ期<sup>8)</sup>の段階が抽出しがたく、この段階も含め突帯文Ⅱ期としたい。そのため、突帯文Ⅰ・Ⅲ期に比べ時間幅が長く、資料の増加と検討が必要な段階である。この段階に相当する土器群は、桂見遺跡包含層出土資料<sup>9)</sup>から突帯文Ⅰ期、Ⅲ期に相当する資料を差し引いたものと考えた。これも突帯文Ⅰ期同様、浅鉢に不明な点が多く、器種組成を十分に把握できていない<sup>10)</sup>。桂見遺跡包含層出土資料から突帯文Ⅰ期、Ⅲ期の資料を差し引いた深鉢の特徴は、口縁端部は面取りされず、刻目も施されない。刻目突帯が口縁端部から下がった位置にめぐる。刻目はD類やO類が主体を占める。器形にはⅠ類、Ⅱ類がある。調整に粗い擦痕が残るナデが認められるようになる。無刻目突帯文はみられない。浅鉢は、大角遺跡にみるような口縁部が鍵手状を呈すものや、逆

「く」字状を呈すものが伴うと考えられる。また、西伯郡淀江町井手跡遺跡にも当該期の資料が認められ、波状方形を呈す浅鉢も伴う<sup>13)</sup>。頓原町板屋Ⅲ遺跡、森遺跡、出雲市三田谷遺跡<sup>14)</sup>でも当該期の土器が出土している<sup>15)</sup>。突帯文Ⅲ期（古段階）

近畿地方の長原式に相当する。古海遺跡出土資料<sup>16)</sup>は、包含層出土ではあるが、量的にも型式的にもまとまった資料で、型式設定に耐える一括資料と考えられ、「古海式」と呼べる一群である<sup>17)</sup>。飯塚博和氏は古海遺跡出土資料をもとに「古海式」を提唱している。筆者も資料の一括性から「古海式」には賛成である。しかし飯塚氏はこの一群を古くみており、筆者とでは時間的位置づけが異なる。深鉢は、口縁端部の調整と突帯の貼りつけが同時処理されるようになるため、突帯が口縁端部に接してつくようになる。刻目も総じて浅く小さくなり、刻目O類やV類が増加する。器形はほぼⅡ類に統一される。また、無刻目突帯が伴う。調整はナデ、粗い捺痕が残るナデ。二枚貝も少量認められる。浅鉢は碗形のもが少量伴う程度である。また、近畿地方の長原式では、二条突帯文が主流となるが、鳥取県では数%以下と極めて少ない。この段階の遺跡は、他の時期に比べ豊富で、西伯郡岸本町下ノ原遺跡<sup>18)</sup>、日野郡溝口町三野部遺跡<sup>19)</sup>、米子市大袋丸山遺跡<sup>20)</sup>、松江石台遺跡<sup>21)</sup>などがある。突帯文Ⅲ期（新段階）

越前山遺跡群15d区土坑資料を基準とする<sup>22)</sup>。遠賀川系土器が含まれておらず、突帯文単純の段階と捉えられる。とりあえず、長原式の幅に収まるものと考えたい。一方で、この段階に山陰地方東部において遠賀川系土器を製作・使用する集落の出現を想定したい。深鉢の特徴は、再び、突帯が口縁端部から下がった位置にめぐることである。刻目突帯と無刻目突帯があり、前者の刻目はO'類やV類が主体となる。器形はⅡ類である。土坑内から浅鉢は出土していないが、突帯の施される壺が伴う。

#### 弥生時代前期前半

この段階で突帯文土器単純の遺跡は見られなくなる。突帯文土器は弥生時代前期の器種組成に含まれるようになるため、これらを突帯文系土器と称し、突帯文土器とは区別したい。この段階の突帯文系土器には2つのタイプが認められる。

一つは、イクス遺跡<sup>23)</sup>、目久美遺跡第5次・6次調査出土資料<sup>24)</sup>を典型例とする一群で、前期前半の遠賀川系土器と伴し、弥生時代前期の器種組成に含まれる土器である。やや反気味の口縁の下がった位置に無刻目突帯がめぐる深鉢を特徴とする。調整はナデや粗い捺痕の残るナデ調整。無刻目突帯が急増し、イクス遺跡では98%が無刻目突帯文土器が占める。また、目久美遺跡では無刻目突帯の施された壺が伴う。

もう一方は、長瀬高浜遺跡出土資料<sup>25)</sup>を典型とする一群である。包含層出土の遠賀川系土器には時間幅があり、長瀬高浜タイプの突帯文系土器がどの段階の遠賀川系土器に伴うものか明確ではないが、イクスタイプ同様、前期前半を主とすると考えられる。長瀬高浜タイプには、遠賀川系土器との折衷形や、肥厚気味の口縁の下がった位置に刻目突帯がめぐるものがある。刷毛目が施されるものが多い。

前者をイクスタイプ、後者を長瀬高浜タイプとするが、この段階に特徴的なのは、両者が一遺跡で伴する例が認められないことである。また、形態、調整などから、前者は突帯文土器単純期から系譜のたどれる一群で、後者は、遠賀川系土器の影響をより強く受けた突帯文系土器と考えられる。

#### 4. 古市河原田遺跡出土資料の位置づけ

ここでは、突帯文土器の変遷に对照しながら、先ほど分類した各類の一括性について検討を加え、それらの時間的な位置づけを行う。

まず、先ほど問題とした深鉢各類の共時性についてみてみよう。一条刻目突帯文には同A類-B類-C・D・E類、一条無刻目突帯文においても同B類-C・D類という型式学的新旧関係が窺われることは前述した。これらは、口縁端部に刻目が施される「一条刻目突帯文A類」、口縁端部から下がった位置に突帯のつく「一条刻目突帯文B、一条無刻目突帯文B類」、突帯が口縁端部に接する「一条刻目突帯文C・D・E類、一条無刻目突帯文C・D類」に3大別できる。

このうち「一条刻目突帯文B類・一条無刻目突帯文B類」は口縁端部を刻まず、突帯が下がった所につくという点で突帯文Ⅱ期の典型といえる。また、「一条刻目突帯文A類」はⅠ期的、「一条刻目突帯文C・D・E類、一条無刻目突帯文C・D類」はⅢ期的である。この3者うち、Ⅰ期的な「一条刻目突帯文A類」と「一条刻目突帯文B類、一条無刻目突帯文B類」、「一条刻目突帯文B類、一条無刻目突帯文B類」とⅢ期的な「一条刻目突帯文C・D・E類、一条無刻目突帯文C・D類」という組み合わせによる共時性に違和感はない。では、古相を呈す「一条刻目突帯文A類」と新相を呈す「一条刻目突帯文C・D・E類、一条無刻目突帯文C・D類」との組み合わせはどうか。

まず、一条刻目突帯文A類の大きな特徴は、口縁端部にも刻目が施されることである。これは、突帯文Ⅰ期に当てはまる特徴の一つである。突帯文Ⅰ期は、面取りした口縁端部への刻みと、器形Ⅰ類を特徴とする。また、口縁部と胴部の調整を区別する意識が強いことも重要である。これに対し、一条刻目突帯文A類の口縁端部は丸くおさめられるものばかりで、面取りは施されていない。さらに、器形の点でも、Ⅱ類が主体的で、桂見遺跡自然河川01下層出土資料とは様相が異なっている。胴部まで残る資料が少ないため、調整の仕分けについては判らないが、器形Ⅱ類の増加は、調整を仕分けるといった意識の低下と密接に関連している。このように、古市河原田遺跡における一条刻目突帯文A類は、桂見遺跡自然河川01下層より新しい様相を呈している。また、口縁端部に刻目をもつ土器は、一括性の高いⅢ期の古海遺跡でも少量出土しており<sup>26</sup>、突帯文Ⅱ期を通じて、当遺跡で一条刻目突帯文A類としたものが一定量存在していると考えられる。

一方、一条刻目突帯文C・D・E類、無刻目突帯文C・D類は口縁端部に接するように突帯文がつく一群で、この特徴は、突帯文Ⅲ期・古海式に認められる。また、器形Ⅱ類が主体を占めることも、古海遺跡出土資料に近い。そこで、突帯の属性から、一条刻目突帯文C・D・E類、無刻目突帯文C・D類と古海遺跡出土資料を比較してみる。まず、古海遺跡出土資料では、突帯の断面形は2類、4類が主体的である。一条刻目突帯文C・D・E類、無刻目突帯文C・D類も同様の傾向を示す。しかし、刻目の形態については、一条刻目突帯文C・D・E類のほうは刻目D・D'類が主体を占め、刻目D・D'類の比率が20%程度の古海遺跡とは異なる。この点で、古市河原田遺跡の一条刻目突帯文C・D・E類、無刻目突帯文C・D類は、古海遺跡より少し古い様相を呈している。

山陰地方東部		中部瀬戸内地方 (平井1996)		近畿地方 (家根1981) (泉1991)	
Ⅰ 期	(桂見遺跡自然河川01)	大別 Ⅰ	阿津走出遺跡 前池式	滋賀里Ⅳ式	鬼塚遺跡下層 標原遺跡
	(桂見遺跡包含層)  古市河原田式	大別 Ⅱ	広江・浜遺跡 南溝手遺跡河蓮Ⅰ	口酒井遺跡	口酒井遺跡
大別 Ⅲ		津島岡大式 沢田式	船橋式	福満遺跡 船橋式	
Ⅲ 期	古海式 (越敷山遺跡)			長原式	長原式

表2 山陰地方東部と中部瀬戸内・近畿地方との併行関係

このように、「一条刻目突帯文A類」、「一条刻目突帯文C・D・E類」、一条無刻目突帯文C・D類も突帯文Ⅱ期に位置づけられるものと考えられる。また、前掲では当該地域における無刻目突帯の出現を突帯文Ⅲ期とし、端部から下がった位置に無刻目突帯が巡るという特徴を弥生時代前期イキスタイプの特徴のひとつと考えた。一条無刻目突帯文B類は口縁端部から下がった位置に無刻目突帯がめぐるが、口縁端部のつくり、突帯の貼付方など刻目一条突帯B類と共通しており、イキスタイプとは形態的に異なっている<sup>20</sup>。つまり、古市河原田遺跡出土の深鉢各類は突帯文Ⅱ期の範疇で捉えられる。

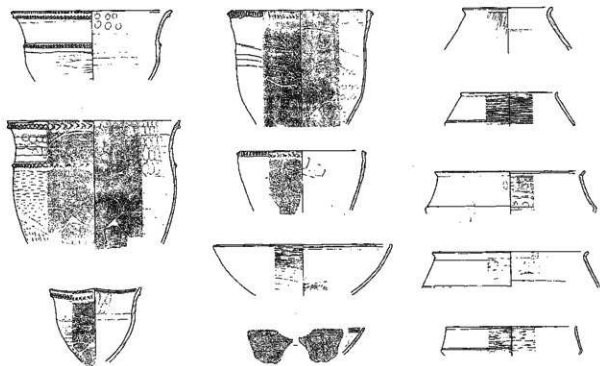
また、突帯の断面形、刻目の形態などの要素が、深鉢各類における型式学的新旧を裏付ける方向性を示すことは先述した。しかし、その変化の度合いは小さい。このことは、ある時間幅の中での共時性を示唆するものであろう。さらに、傾向として新しい要素である刻目V類、O類が各類にほぼ一定量認められることは、突帯文Ⅱ期において突帯文Ⅲ期に近い様相をもつことが指摘できる。

壺、浅鉢もいくつかの類型に分けることができる。浅鉢の変遷が把握されている近畿地方、中部瀬戸内地方と比較すると、後述するように個々の形態的特徴の一部に違いはあるものの、古市河原田遺跡における壺・浅鉢各類の在り方は、突帯文Ⅱ期に併行する船橋式、沢田式の浅鉢に近い様相をもっており、古い段階の浅鉢を含まない。仮に、深鉢各類が時間差として捉えられるならば、同様の傾向が浅鉢でも看取できるはずである。つまり、浅鉢の在り方も、古市河原田遺跡出土資料の突帯文Ⅱ期における一括性を示すものといえる。

以上、古市河原田遺跡出土資料は突帯文Ⅱ期の範疇におさまる一様式として理解できる。突帯文Ⅱ期が、近畿地方や中部瀬戸内地方の数型式に対応する長い時間幅をもつことは先述したが、深鉢に関しては、当該地域における突帯文Ⅲ期的な様相を持つものを含み、また、深鉢・壺・浅鉢の属性レベルでは周辺地域の船橋式、沢田式に対応する。そこで、第128・129・133・134図に示した深鉢・壺・浅鉢からなる一群を「古市河原田式」として突帯文Ⅱ期の新しい段階に位置づけたいと考える（表2）。

## 5. まとめ

今回の調査で出土した突帯文土器は、量的にまとまっており、良好な資料の少ない当該地域にあって、器種組



第135図 岡山県百間川沢田遺跡土器濠まり13・14出土資料



成の把握できる一群として、編年の研究において重要な位置を占めると考えた。この土器群について、分類を行い検討を加えた結果、突帯文Ⅱ期の新しい段階に位置することが明らかになった。この一群「古市河原田式」を介すことで、突帯文Ⅲ期「古海式」への変遷もスムーズにとどれるものと考えられる。

深鉢は二条突帯文が少量伴うものの、ほぼ一条突帯文からなる。器形については、器形Ⅰ類11%、器形Ⅱ類65%（不明24%）という割合を示しており、この段階には砲弾形を呈す器形Ⅱ類がかなり主体的になることが窺われる。このことに加え、口縁端部に突帯が接してつく類、刻目を軽く浅く施すものが半数を占めるといえる。一方、突帯文土器において古い様相とされる口縁端部の刻目が、突帯文Ⅱ期に出現する砲弾形の器形Ⅱ類にも刻目一条突帯文A類が存在することから、突帯文Ⅱ期において、一定量のような類が認められることが明らかになった。

また、これまで不明であった当該地域における壺の出現は、少なくともこの段階までさかのぼる。浅鉢についても、山陰地方東部における当該期の様相を大方示しているものと考えられ、浅鉢各型の在り方は周辺地域と大差ない。しかし、ほぼ併行関係にあると考えられる百間川沢田遺跡土器溜まり13・14<sup>m</sup>出土の浅鉢と比べると、口縁部が外屈する浅鉢が当遺跡では認められず、逆に当遺跡に認められる一条の沈線をした類が百間川沢田遺跡に認められないなど、口縁部の形態などに異なった点も認められる（第135）。これが地域性によるものなのか、微妙な時間差を反映したものなのかは今後の課題である<sup>27)</sup>。

なお、小稿では、周辺地域の資料との比較検討を十分に行うことができなかった。また、不明な点の多い突帯文Ⅰ・Ⅱ期前半の良好な資料の増加を期待したい。「古市河原田式」についても、新資料による再考が望まれる。本稿を成すにあたり、小林青樹氏には飯塚氏の論考をご教示していただいた。記して感謝申し上げます。

（濱田）

注 1) 濱田電彦 1998「日久美遺跡における縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器について－県内資料との比較から－」『日久美遺跡Ⅴ・Ⅵ』米子市教育文化事業団

濱田電彦（1998）脱稿・未発表「樹輪・竹箸の突帯文土器と濠貫川式土器」

- 2) 例えば、家根祥多 1984「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所
- 3) 平井 勝 1996「瀬戸内地域における突帯文土器の出現と展開」『古代吉備』第18集
- 4) 牧本哲雄ほか 1996「桂見遺跡－八ッ割地区・提谷東地区・提谷西地区－」鳥取県教育文化財団
- 5) 柳浦俊一 1994「森遺跡 板屋遺跡Ⅰ 森脇山城遺跡 阿乃谷社堂遺跡」鳥取県教育委員会
- 6) 角田幸徳 1998「板屋Ⅲ遺跡」鳥取県教育委員会
- 7) 泉 拓良 「西日本突帯文土器の編年」『文化財学報』第8集
- 8) 平井 勝 1996「瀬戸内地域における突帯文土器の出現と展開」『古代吉備』第18集
- 9) 牧本哲雄ほか 1996「桂見遺跡－八ッ割地区・提谷東地区・提谷西地区－」鳥取県教育文化財団
- 10) 鳥取市大角遺跡の試掘資料から、おおよその組み合わせを窺うことができる。山田良宏ほか 1998「鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書」鳥取市教育委員会
- 11) 太田正康ほか 1993「井出跡遺跡」鳥取県教育文化財団
- 12) 鳥谷芳雄 1996「鳥取県出雲市・三田谷」遺跡」『第7回 中国縄文研究会』資料
- 13) 岡嶋、伯耆、出雲はほぼ同じような様相を呈すが、出雲山間部に関しては、二条突帯文土器が多く認められ、瀬戸内の様相が強いことが指摘されている。
- 14) 平川 誠 1981「古海遺跡発掘調査概報」鳥取市教育委員会
- 15) 飯塚博和 1998「古海式二題」『異巻』16号

- 16) 赤見高好 1997『岸本下ノ原遺跡発掘調査報告書』岸本町教育委員会
- 17) 増田 晃ほか 1990『三都野遺跡発掘調査報告書』溝口町教育委員会
- 18) 下高瑞哉 1991『大袋九山遺跡』米子市教育委員会
- 19) 川原和人 1984『鳥根県における縄文晩期凸帯土器の一試考』『鳥根考古学会誌』第1集  
 梅浦俊一・守岡正司 1993『石台遺跡Ⅱ』鳥根県教育委員会
- 20) 中原 斉ほか 1994『地蔵山遺跡群』会見町教育委員会・岸本町教育委員会
- 21) 根鈴輝雄・土井珠美 1988『北面遺跡群 イキス遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
- 22) 濱田竜彦ほか 1998『日久美遺跡V・VI』米子市教育文化事業団
- 23) 土井珠美 1983『第Ⅲ章 遺物 第1節 遺構外出土の縄文土器・弥生土器』『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ』鳥取県教育文化財団
- 24) 古海遺跡で口縁端部に割目をもつ土器は、口縁端部に接して突帯が描かれており、形態的に明らかに新相を示している。  
 平川 誠 1981『古海遺跡発掘調査概報』鳥取市教育委員会
- 25) 例えば、日久美遺跡第5・6次調査で出土した突帯文土器のうち無割目突帯文土器Ⅲ・Ⅳ類としたものをイキスタイプの典型と考えるが、これらは口縁部が外反する傾向にある。濱田竜彦ほか 1998『日久美遺跡V・VI』米子市教育文化事業団
- 26) 岡田博ほか 1985『百間川沢田遺跡2・百間川長谷遺跡2』岡山県教育委員会
- 27) 深鉢についてみるなら、百間川沢田遺跡土器溜り13・14出土資料と古市河原田遺跡出土資料とは、以下の点が異なっている。

1. 百間川沢田遺跡では古市河原田遺跡より二条突帯文の量が多い。
2. 百間川沢田遺跡では器形Ⅰ類が主体的である。
3. 百間川沢田遺跡では突帯が口縁端部から下がった位置につくものが多い。

このうち1については、従来から指摘されているように地域性といった問題である。しかし、2・3については時間的な差に起因する可能性を考慮する必要があり、古市河原田遺跡の方が百間川沢田遺跡より新相を呈しているとも考えられる。しかし、浅鉢の問題も含め、微妙な併行関係について、ここでは保留しておきたい。

#### 参考文献

- 泉 拓良 1989『西日本磨研土器様式』『縄文土器大観4 後期晩期縄文』小学館  
 1991『西日本突帯文土器の編年』『文化財学報』第8集
- 平井 壽 1988『岡山県における縄文時代晩期突帯文土器の様相』『古代吉備』第10集
- 梅浦俊一 1994『鳥根県の縄文時代後期中葉～晩期土器の概要－飯石群頼原町森遺跡出土土器を中心に－』  
 『鳥根考古学会誌』第11集
- 山本悦彦 1992『縄文時代晩期の土器群について』『岡山大学構内遺跡発掘調査報告書』第5号

## 2. 米子平野周辺における縄文時代の石器利用について

### 1. はじめに

米子平野周辺における縄文時代の石器研究は、長山馬籠遺跡<sup>1)</sup>、目久美遺跡<sup>2)</sup>などで、おもに縄文時代前期の詳細な報告・検討が行われているものの、その他の時期については、積極的な議論はあまり進んでいない。今回、古市河原田遺跡からは、縄文時代後・晩期の石器が多数出土しており、この時期の石器利用に関する良好な資料が得られた。本稿では、長山馬籠遺跡、目久美遺跡第1次調査出土資料との比較・検討を行うことによって、概略ながら米子平野周辺における縄文時代の石器利用について考察することを目的とする。

### 2. 各遺跡の様相 (第136図)

#### 古市河原田遺跡 (米子市)

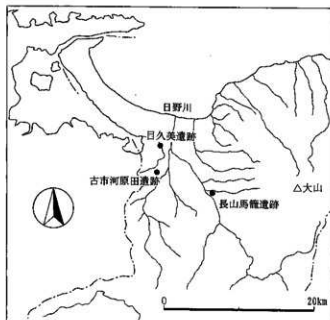
加茂川の支流によって形成された谷間から平野部へいたる出口に位置している。縄文時代においては後期から晩期の遺構・遺物が確認されている。石器としては、図化不可能な小片を含めると製品が224点、剥片が多数出土している。石鏃、楔形石器、加工痕・微細剥離痕のある剥片、スクレイパー、石核、磨石・凹石・敲石類、石皿、石錘、砥石、打製石斧、磨製石斧が認められる (表1)。

#### 長山馬籠遺跡 (日野郡溝口町)

日野川の支流大江川によって形成された河岸段丘上に位置する。縄文時代においては、早期から前期の遺構・遺物が確認されている。石器製作場所も検出されており、石器の総数は10,349点にのぼる。石鏃、異形石器、楔形石器、加工痕・使用痕のある剥片、石核、剥片、磨製石斧、磨石・凹石・敲石類、石皿、台石、石錘、砥石、が認められる。

#### 目久美遺跡 (米子市)

中海沿岸の低地に位置している。縄文時代においては早期末から晩期の遺構・遺物が確認されている。石器の総数は1,002点を数える。石鏃、石槍、石匙、石鏃、スクレイパー、楔形石器、石核、剥片、磨石・凹石・敲石類、石皿、台石、石錘、砥石、石製品が認められる。



第136図 遺跡分布

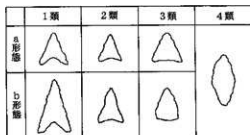
	縄文 後期	縄文 晩期	時期 不明	総数
石鏃	15	9	83	107
楔形石器	7	2	6	15
加工痕・微細剥離 痕のある剥片	3	1	0	4
スクレイパー	4	0	1	5
石核	0	0	6	6
磨石	13	3	24	40
石皿	3	0	1	4
石錘	3	0	2	5
砥石	1	0	1	2
打製石斧	1	5	16	22
磨製石斧	1	1	12	14
総数	51	21	152	224

表1 古市河原田遺跡縄文時代石器数量

### 3. 各器種の比較

#### a) 石鏃

石鏃の分類に関しては、報告では凹基式、平基式、凸基式に分類したが、本稿では村田幸子の分類案<sup>1)</sup>をもとに次のように細分した(第137図)。基部の形態から括りの深いものを1類、括りの浅いものを2類、平基式を3類、凸基式を4類とし、1類から3類に関しては全体の形状が「正三角形に近いものをa形態、二等辺三角形のものをb形態とする。本文では1類のa形態を1-a類のように表記する。以下、各遺跡の石鏃について整理した後、検討を加える。



第137図 石鏃の分類

#### 長山馬籠遺跡(表2-1)

縄文時代の石鏃の総点数は165点を数える。このうち、破片を除いた製品のうち、99点を分析の対象とする。時間的には早期にさかのぼる可能性のあるものも含むが、製作技法および土器の伴出例から、前期を中心にする」と報告されている。使用石材の割合は黒曜石80%、サヌカイト18%、他2%であり、黒曜石が圧倒的である。分類別にみた場合、1類が85%を占める。この中には括りが深くブーメラン形を呈するもの、逆U字形の大きな括りが施されるものがある。

#### 目久美遺跡(表2-2・3)

縄文時代の石鏃の総点数は98点を数える。出土層位からみて前期～後期の資料があるが、ここでは数的にまとまりのある前期および中期に属するものうち、図示された78点を分析の対象とする。前期に属する資料のうち、出土層位からさらに時期を特定できる資料もあるが、ここでは前期として一括して扱う。前期64点、中期14点を数える。使用石材の割合は、前期では黒曜石84%、サヌカイト16%であり、中期では黒曜石79%、サヌカイト14%、他が7%である。

#### 古市河原田遺跡(表2-4・第138図)

##### 1. 長山馬籠遺跡

	黒曜石	サヌカイト	その他	総計(%)
1-a類	38	7	1	46(55)
1-b類	22	3	0	25(30)
2-a類	2	2	0	4(5)
2-b類	2	2	1	5(6)
3-a類	0	1	0	1(1)
3-b類	0	2	0	2(2)
4類	1	0	0	1(1)
不明	10	1	0	11
未製品	4	0	0	4
総計	79	18	2	99

##### 2. 目久美遺跡(縄文前期)

	黒曜石	サヌカイト	その他	総計(%)
1-a類	21	3	0	24(38)
1-b類	18	6	0	24(38)
2-a類	6	0	0	6(10)
2-b類	2	1	0	3(5)
3-a類	3	0	0	3(5)
3-b類	3	0	0	3(5)
4類	0	0	0	0(0)
不明	1	0	0	1
総計	54	10	0	64

##### 3. 目久美遺跡(縄文中期)

	黒曜石	サヌカイト	その他	総計(%)
1-a類	1	1	0	2(17)
1-b類	3	1	0	4(33)
2-a類	2	0	0	2(17)
2-b類	3	0	0	3(25)
3-a類	0	0	0	0(0)
3-b類	1	0	0	1(8)
4類	0	0	0	0(0)
不明	1	0	1	2
総計	11	2	1	14

##### 4. 古市河原田遺跡

	黒曜石	サヌカイト	その他	総計(%)
1-a類	14	7	0	21(24)
1-b類	14	13	0	27(30)
2-a類	7	4	0	11(12)
2-b類	8	5	0	13(15)
3-a類	4	1	0	5(6)
3-b類	5	4	0	9(10)
4類	2	1	0	3(3)
不明	2	4	0	6
総計	56	39	0	95

表2 石鏃各類の比率

縄文時代の石鏃の総点数は95点である。この中には、出土層位から縄文時代後期と特定できるものが15点、縄文時代晩期と特定できるものが9点含まれる。他遺跡と比較する場合には、資料数が少ないため、これらを縄文時代後・晩期として包含層出土資料とともに一括して扱う。使用石材の割合は黒曜石59%、サヌカイト41%である。3・4類の割合が約20%を占めている点が注意される。

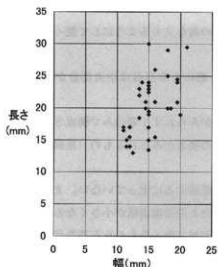
これら遺跡ごとの資料を比較した場合、長山馬籠遺跡、目久美遺跡の前・中期の資料と、古市河原田遺跡の後・晩期の資料で異なった様相を呈していることがわかる。長山馬籠遺跡と目久美遺跡においては、遺跡の立地が異なっているにもかかわらず類似した傾向を示しており、このことは、これらの資料の傾向が時期的な傾向を反映していることをうかがわせる。

まず、使用石材の割合の違いがあげられる。長山馬籠遺跡、目久美遺跡では黒曜石の割合が80%前後と非常に高い割合を占めるのに対して、古市河原田遺跡においては60%程度にとどまっており、サヌカイトの利用が目立つ。いずれの遺跡においても黒曜石は隠岐島産であり、また、長山馬籠遺跡・古市河原田遺跡のサヌカイトは金山産であるとの分析結果を得ており、使用石材の割合の変化が石材の供給元の変更によるものではないことはほぼ間違いなさであろう。

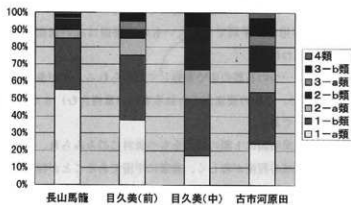
次に、形態別比率の違いが挙げられる(第139図)。長山馬籠遺跡、目久美遺跡では凹基式である1・2類の割合が90%以上と非常に高い。特に1類の割合は75%以上を占めており、抉りを深く入れる傾向にある。これに対し古市河原田遺跡では1・2類が81%、特に1類が54%にとどまっており、抉りのない3・4類が19%を占める。このような傾向は、縄文時代晩期に西日本において1類が減少し、2・3類が増加するとする村田による検討結果<sup>1)</sup>と矛盾するものではなく、凡西日本の石鏃の変化の中で捉えることができるだろう。時期が下るにつれ抉りを省略する傾向の要因としては、作業の省力化、簡便化、それに伴う素材の有効利用などが想定できるのではないだろうか。

さらに、サヌカイト製石鏃に注目した場合、古市河原田遺跡には、大きな剥離面を残す資料が多い。目久美遺跡の前・中期の資料<sup>2)</sup>や、古市河原田遺跡の黒曜石製石鏃にもこのような特長はあまりみられないことから、サヌカイト製石鏃を製作する時点で、大剥離面を残す仕上げを余儀なくされた結果によるものと考えられる。すなわち、石鏃の素材となるサヌカイトに何らかの制約があり、丁寧に剥離を繰り返して形状を整えるだけの量的な余裕がなかったのではないかと考えられる。

以上のことから、米子平野周辺の縄文時代の石鏃に関して、次のように整理できるであろう。前・中期から後・晩期にかけて、黒曜石とサヌカイトの石材供給比率が変化しており、後・晩期においてはサヌカイトの利用が図られていることがわかる。時期によって使用石材の比率が変化するが、同時期の石鏃は石材を異にしても各形態の比率がほぼ同じであり、指向する形態に石材による使い分けはなかったと考えられる。しかし、古市河原田



第138図 古市河原田遺跡石鏃長幅比



第139図 石鏃各々の比率

遺跡の大剥離面を残す石鏃の検討から、後・晩期においても、サヌカイト素材の供給は必ずしも潤沢であったわけではないことがうかがえる。また、各形態の比率の変化は、こういった石材供給に関連した、石材の有効利用に関わる可能性があることを指摘しておきたい。

#### b) 磨石・凹石・敲石類

分類に関しては、事実報告で行った分類を各遺跡に適用した。以下、各遺跡の磨石・凹石・敲石類を概観した後、検討を加えたい。

##### 長山馬籠遺跡

計45点出土している。出土状況から弥生時代である可能性の高い3点を除き、さらに報告書で図示、もしくは記述のある20点を分析の対象とする。時期は特定されていない。データのある完形品の平均重量は約512g。磨面のみがみられるもの6点(30%)、凹痕のみがみられるもの1点(5%)、敲痕のみがみられるもの4点(20%)、磨面・凹痕がみられるもの1点(5%)、磨面・敲痕がみられるもの5点(25%)、凹痕・敲痕がみられるもの1点(5%)、磨面・凹痕・敲痕がみられるもの2点(10%)である。

##### 日久美遺跡

計86点出土している。前期57点、中期26点である。完形品の平均重量は前期約479g、中期約483g。磨面のみがみられるもの前期11点(19%)、中期2点(8%)、凹痕のみがみられるもの前期3点(5%)、中期7点(27%)、敲痕のみがみられるもの前期22点(39%)、中期10点(38%)、磨面・凹痕がみられるもの前期3点(5%)、中期0点(0%)、磨面・敲痕がみられるもの前期15点(26%)、中期4点(15%)、凹痕・敲痕がみられるもの前期1点(2%)、中期3点(12%)、磨面・凹痕・敲痕がみられるもの前期2点(4%)、中期0点(0%)である。

##### 古市河原田遺跡

計34点出土。完形品の平均重量は約665g。磨面のみがみられるもの18点(53%)、凹痕のみがみられるもの3点(9%)、敲痕のみがみられるもの0点(0%)、磨面・凹痕がみられるもの7点(21%)、磨面・敲痕がみられるもの4点(12%)、凹痕・敲痕がみられるもの0点(0%)、磨面・凹痕・敲痕がみられるもの2点(6%)である。花崗岩、大山系安山岩など、近隣で獲得できる石材の利用が図られている。磨面をもったものが大半を占めている。

これら石器の形状、作用面の特長などは一律ではなく、使用に際しての何らかの使い分けが行われていたことが想定される。検討において何らかの比較項目の設定が必要であるため、ここでは試みに磨面の状態から3分類し、その使用法を想定してみたい(第140図)。

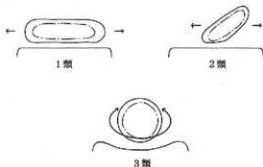
1類：作用面が平坦で、面的に磨面が認められるもの。多くは扁平形状を呈する。石皿などの作業台に対して平行に接する。組になる石皿は平坦な面をもつ形態と思われる<sup>9)</sup>。

2類：作用面が平面から側面にかけての変換部分に認められるもの。石の角を立てるようにして使ったと思われる。作業台に対して斜行して接する。

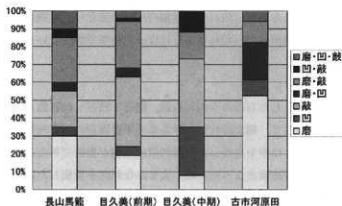
3類：作用面が平坦でなく丸いもの。磨面は丸い表面全体に広がる。組になる石皿は中央部分がやや凹んだ形態と思われる。

これら一つ一つの石器の中で重複して認められることが多い。凹痕・敲痕がみられず1類のみで構成されるもの14点(41%)、2類の要素がみられるもの(重複含む)8点(24%)、3類の要素がみられるもの(重複含む)6点(18%)である。

2類は表裏両面に1類の磨面をもつ資料にのみみられ、単独で一石器を構成するに至っていない。また、2類の磨面は磨滅の程度が著しく、非常に平滑であることが特長である。作業台との接地面積が小さくなるため、力がより狭い範囲に集中する結果によるものであろう。これらのことは、一度粗く磨ったものを石器を代えずにさらに細かく磨りつぶした結果によるものと考えられる。1kg以上の大型の資料に2類は認められないが、細かい粉砕には大型品は扱いにくかったためであろう。



第140図 磨石の分類



第141図 磨面・凹痕・敲痕の比率

3類には、中央に凹痕のある資料3点が注目される (S169・S189・S193)。通常、凹石の機能として考えられているような台として置いて使用できるような形状をしておらず、平面においても安定しない。凹痕も浅い。凹のある面が平坦でなく凸レンズ上を呈しているため、対象物を置いて安定させることはできない。これは石皿などの上に磨りつぶす対象物を置いた後、まず加撃して砕き、そのまま磨りつぶしを行うのに使用し、このため凹みが浅く残ったものと思われる。

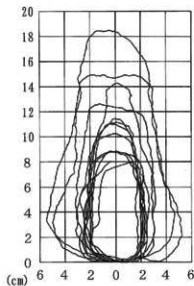
古市河原田遺跡出土の磨石を1～3類に分類し、その使用方法を想定してみた。1類は量的に最も多く、通常頻繁に行われた使用方法であろう。2類は1類から独立した使用方法ではなく、密接なつながりをもった一連の作業の結果によると思われる。これら1・2類に対し、3類は対象物の違いなどによって使い分けられていたと推測される。

各遺跡の磨石・凹石・敲石類を比較した場合、長山馬籠遺跡、目久美遺跡は類似した傾向を示すのに対し、古市河原田遺跡はやや様相を異にする (第141図)。古市河原田遺跡に敲痕をもつ資料はあまり見られず、また、磨面のみをもつ資料の割合が非常に高いことが目につく<sup>7)</sup>。その多くが1類である。作用面の痕跡が、具体的にどのような場面で使われた結果生じたものか明確でない以上、これらの違いを推定するには限度があるが、磨石・凹石・敲石類がおもに食物調理用に用いられたとして、「敲き」から「磨り」への移行は、獲得する食料、もしくは調理法に変化があったのではないだろうか。

### c) 打製石斧

古市河原田遺跡では、図化できなかった小片を含めると22点の打製石斧が出土している。今回の報告では刃部幅が基部幅を超えるものを撥形としたが、その差が小さく短冊形との区別が不明確なものを含んでいる。長さは様々であるが、幅が5cm前後に集まる (第142図)。完形品の平均重量は約157g。大半が100g以下である。S152には刃部の片側に擦痕がみられ、平井勝が想定したように<sup>8)</sup>、鎌のように柄と製品が鋭角になるように装着されていたと思われる。擦痕はみられないが、S153も同様であろう。他の資料は擦痕等はみられないが、その形状から鈴木忠司が指摘したように<sup>9)</sup>棒状の柄に動先のように装着したものと思われる。

長山馬籠遺跡、目久美遺跡では打製石斧は出土していない。打製石斧は、根茎類を獲得するための土掘具であるとの機能が想定されているが<sup>10)</sup>、米子平野周辺においても縄文時代後・晩期に打製石斧の利用が図られ、生業に変化があったのであろう。このことは、先にふれた磨石・凹石・敲石類の傾向の変化との関連を考えるとさらに鮮明になる。古市河原田遺



第142図 古市河原田遺跡  
打製石斧外形

跡にみられる磨石・凹石・蔽石類の比率の変化は、打製石斧の利用により、これまで以上に根莖類の採取・粉砕が積極的に行われるようになった結果であるという可能性を指摘できるのではないだろうか。

#### 4. おわりに

今回出土した石器のうち、石鏃、磨石・凹石・蔽石類、打製石斧を取り上げ、長山馬籠遺跡、目久美遺跡との対比によって、縄文時代における米子平野周辺の石器利用の様相について述べた。古市河原田遺跡について、他の2遺跡とはやや異なった石器利用の様相が指摘できたと思う。しかし、縄文時代前・中期と後・晩期という長い時間幅の比較となったため、大まかな傾向を指摘したに過ぎない。変化の背景や、石器利用の実態に迫るにはさらなる資料の観察・検討が必要であるが、資料の増加を待ちつつ、今後の課題としたい。

最後になりましたが、目久美遺跡の石鏃の実見にあたって、下高瑞哉氏にお世話になりました。記して感謝の意を表します。

(濱)

- 註 1) 益田 晃・中原 斉・澁川友子 1989『長山馬籠遺跡』溝口町教育委員会  
2) 小原貴樹ほか 1986『目久美遺跡』米子市教育委員会  
3) 村田幸子 1997『石鏃の大型化をめぐる様相』『研究調査報告』第1集 (財)大阪府文化財調査研究センター  
4) 前掲註3  
5) 目久美遺跡第1次調査の石鏃に関しては、可能な限り実見し、確認している。  
6) 古市河原田遺跡出土の石鏃には、作用面が平坦なもの(S170・S206)と、やや凹んだもの(S197・S198)の二者がある。  
7) 磨面・蔽痕については、範囲のみが図示される都合上、実見していないため具体的な比較検討がなし得ず、報告者の違いによって認識するレベルに差が出る可能性があることは否めない。しかし、蔽石に関しては、古市河原田遺跡において明確に蔽痕と判断される作用面をもつ資料は少なく、報告者間での認識に大きな違いはないと仮定して論を進める。磨面・凹面についても同様である。  
8) 平井 勝 1985『瀬戸内地域における縄文時代研究の課題-晩期農耕について-』『考古学研究』  
9) 鈴木忠司 1975『第3章 第5節 石器 2. 打製石斧』『京都府舞鶴市桑畑下遺跡発掘調査報告書』平安博物館  
10) 前掲註9



## 第10節 まとめ

古市河原田遺跡における今回の調査では縄文時代中期～中・近世にいたる遺構・遺物を確認したが、調査区が遺跡の縁辺部にあたること、予想以上に圃場整備による削平を受けていたことから、弥生時代中・後期～中・近世の遺跡の様相については、不明な点が多い。しかし、弥生時代後期においては、住居跡と考えられる遺構の一部（S I 01）や土器を伴う土坑（S K 15・16）が検出されており、この地が居住域の一部であったことが窺われる。その後も、古墳時代にはほぼ南北に延びる溝状の遺構（S D 04・05）や、中世には池の可能性のある落ち込み（S X 01）が認められるなど、遺跡が断続的に現在に至っていることが明らかになった。以下、今回の調査の大部分を占めた縄文時代を中心に概略することでまとめたい。

今回の調査で出土した最も古い遺物は縄文時代中期前半に位置づけられる土器である。遺跡の形成もこの時期までさかのぼるだろう。しかし、縄文時代中期にさかのぼる遺構を検出することはできなかった。中期以降、後期から晩期にかけて断続的に遺跡が営まれるようであるが、本調査地は遺跡の主体からはずれており、検出できた遺構の数は多いとはいえない。中期の遺構も調査地の周辺に存在するものと推察される。

最も多くの遺構が確認できたのは、後期中葉である。出土した土器量からも、遺跡のピークのひとつがこの時期にあることがわかる。後期中葉の遺構面は2面存在しており、特に、第2遺構面では土坑・ピット群を検出した。この第2遺構面の時期は遺構内出土遺物から彦崎KⅡ式と考えられる。また、第2遺構面で検出した土坑・ピット群は3区に集中する。仮に、調査区東側の丘陵裾部に集落の主体があったとするならば、本調査区は集落の西側縁辺部にあたる。土坑は浅く遺存状況は良好とはいえないものの、同規模のものがままとまっていることを積極的に評価するなら、貯蔵穴群と考えることもできる。

もう一つのピークは晩期後葉である。後期末から晩期中葉の土器はほとんど認められない状況で、この間、一時的に遺跡の縮小ないし断絶があったものと思われる。ただし、晩期後葉土器は多量に出土したものの、検出できた遺構は少なく、該期における遺跡の様相は不明である。一方で、晩期後葉の土器群はまとまった資料として評価でき、当該地域の編年資料として重要であると考えられる。

一方、土器以外にも興味深い資料が認められる。まず、石器である。出土状態は良好なものばかりとはいえないが、多様な石器が豊富に出土している。西伯著では、石器の在り方を把握できる遺跡は少なく、当遺跡出土の石器資料は注目できる。また、剥片石器および剥片の産地同定により、黒曜石については隠岐島、安山岩については讃岐・金山から運ばれてきたものであることが指摘されている。よって、本報告では非大山系の安山岩についてサヌカイトと呼称した。また、礫石器には、大山で産出する石材に加え、遺跡周辺、そして日野川上流域で産出する石材が使用されていることが明らかになった。本調査では資料的制約から石材の獲得方法について詳細な検討を行うことはできなかったが、今後、当該地域の縄文遺跡の調査のさいには注意を要する問題であろう。

さらに、土偶、岩偶と思われる土製品、石製品が出土しており、断片的ではあるが、貴重な資料を得ることができたとはいえる。土偶については、県内では、これまでに東伯郡東伯町森藤第2遺跡に1点が知られるだけであった。第80図344は森藤例より新しいと推測されるが、分銅形を呈す森藤例とは形を異にしている。特に、344は胸部を貫通する穴で表現する点に個性がある。ただ、胸部上半の形態、足部の表現がないことはやはり分銅形の系譜でたどれるとも考えられる。一方、345は弥生時代後期の堆積層から出土しており所属時期は不明である。胸と正中線の表現が認められ、土偶の胸部と考えられる。S 24は石英を加工しており、岩偶の足部と考えられる。時期は後期前中葉と考えられる。形態は異なるが、米子市目久美遺跡でも岩偶足部片が出土している。

当遺跡から2～4km程度の離れたところに、目久美遺跡、陰田遺跡が所在している。両遺跡とも山陰地方を代表する縄文遺跡で、縄文時代早期末ないし前期から晩期にかけて遺跡が営まれていることで知られる。しかし、これまでの調査で出土した遺物から推察するかぎり、遺跡の在り方は連続的ではなく断続的である。古市河原田遺跡のピーク（縄文時代後期中葉、晩期後葉）が、目久美遺跡や陰田遺跡で遺物の出土量が希薄な時期にあたることは注目されよう。しかし、両遺跡とも調査範囲が遺跡の主体にほとんど及んでいないため、出土した土器量

が遺跡の実体を表しているものか否か判断しかねる。今後の調査に期待したいが、このような近い位置関係にある遺跡の在り方を積極的に評価するなら、相互補完的な関係と理解することも可能である。集落の移動、または集落の統合ないし分離といった集落間の動向を示すと考えることもできるだろう。中海に面し、背後に大江山麓をひかえる米子平野とそれをとりまく法勝寺丘陵性山地では、恵まれた自然環境がもたらす豊かな資源を背景とした縄文人の多様な生活が窺われる。古市河原田遺跡が、縄文時代後期中葉、晩期後葉において、当該地域の一翼を担う集落であった可能性も想定しながら、係る問題の多くは今後の課題としたい。

また、今回の調査結果が多少なりとも地域の歴史解明に貢献できれば幸いである。1年間にわたる現地調査・遺物整理を振り返ると、いつになく短い1年であったと感じる。現地での調査は、河原田という小字が示すごとく、礫との格闘でもあった。最後になりますが、作業に従事していただいた方々に厚く感謝申し上げます。

(濱田・濱・吉田)

图

版



1. 調査前全景 (北から)



2. 調査前全景 (南から)

図版 2



1. 西区古銭出土状況 (西から)



2. S D01完掘状況 (南東から)



3. S D01・04断面 (a-a'、西から)



4. S D01断面 (b-b'、北から)



5. S K01完掘状況 (東から)



6. S D03断面 (g-g'、北から)



7. 西1区完掘状況 (南から)



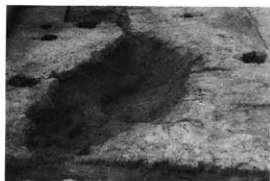
8. S D03断面 (南から)



1. S D02完掘状況 (東から)



2. S D03 (西2区) 完掘状況 (南から)



3. S K12完掘状況 (南から)

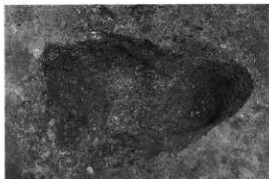


4. S D03杭検出状況 (塚7、北から)

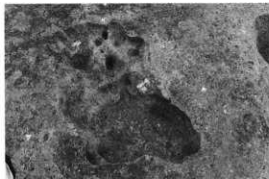


5. 西2区完掘状況 (南から)

図版 4



1. S K05完掘状況 (西から)



2. S K06完掘状況 (北から)



3. S K07完掘状況 (北から)



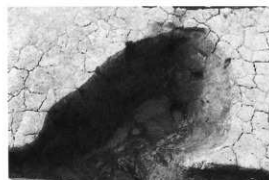
4. S K08完掘状況 (東から)



5. S K25完掘状況 (西から)



6. S K27完掘状況 (西から)



7. S K09完掘状況 (北から)



8. S K13礫検出状況 (南から)



1. SK11検出状況（西から）



2. SK11検出状況（北から）



3. SK11完掘状況（西から）



4. SD10断面（s-s'、西から）



5. SK29断面（北から）



6. SK29完掘状況（南から）



7. SD42完掘状況（北から）



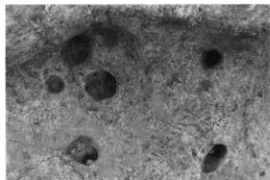
8. 東1区完掘状況（北から）



図版 6



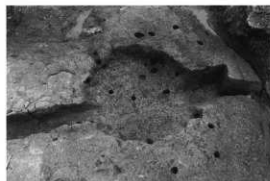
1. SK10断面 (北から)



2. SK10底面ピット群近景



3. SK10遺物出土状況 (北から)



4. SK10完掘状況 (北から)



5. SK10遺物出土状況 (北から、近景)



6. SB11・12完掘状況 (北から)



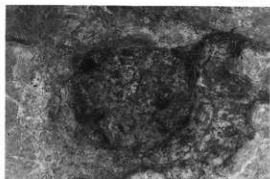
7. SI03検出状況 (東から)



8. SI02・03完掘状況 (南から)



1. S102・03中央ビット断面（西から）



2. S102・03中央ビット完掘状況（西から）



3. S101～03断面（北から）



4. S101～03周溝断面（西から）



5. S101完掘状況（南から）



1. 西1、東1・2区完掘状況 (西から)



2. SD19検出状況 (東から)



3. SD19遺物出土状況 (西から)



4. SD19遺物出土状況 (東から)



5. SD19断面 (D-D'、東から)



6. SD19断面 (E-E'、東から)



7. SD19完掘状況 (東から)



1. 東3・4区完掘状況



2. 東2・3区完掘状況



3. S K16完掘状況 (北から)



4. S K18完掘状況 (東から)



5. S K15完掘状況 (北から)

図版10



1. S D23・26・45断面 (南から)



2. S D26完掘状況 (東から)



3. S K19断面 (南東から)



4. S K19礫検出状況 (南東から)



5. S K30断面 (北から)



6. S K30遺物出土状況 (東から)



7. S K30完掘状況 (南東から)



8. S D14断面 (i-i'、南西から)



1. 西3区完掘状況(南から)



2. SD40(西3区)木製品出土状況(南から)



3. SD21遺物出土状況(東から)



4. SD21遺物出土状況(北東から)



5. SD21遺物検出状況(北西から)



6. SD21断面(西から)



7. SD21断面(北西から)



1. SD28断面 (C-C'、北西から)



2. SD29断面 (J-J'、西から)



3. SD30断面 (A-A'、西から)



4. SD29断面 (I-I'、西から)



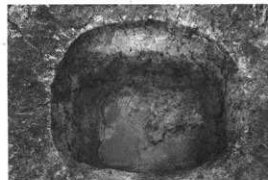
5. SD30遺物出土状況 (西から)



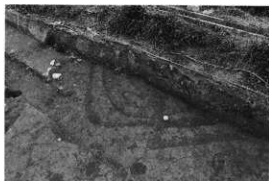
6. SD37断面 (N-N'〈部分〉、東から)



7. SK20完掘状況 (北から)



8. SK23完掘状況 (南東から)



1. S105~07検出状況（北東から）



2. S108遺物出土状況（南から）



3. S108中央ピット断面（北から）



4. S108遺物出土状況（北東から）



5. S104・08・09完掘状況



図版 14



1. S108・09完掘状況（東から）



2. S104完掘状況（南から）



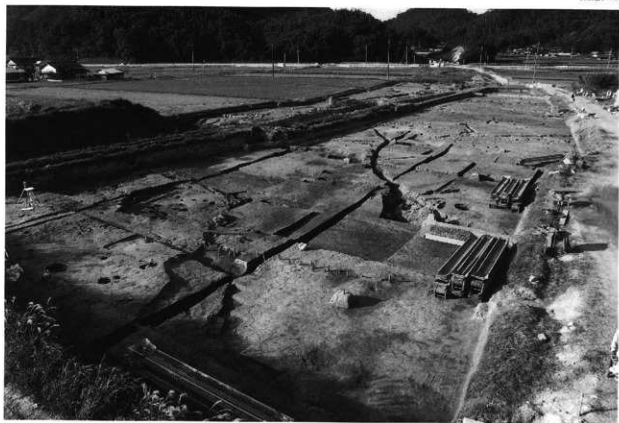
3. 東4区完掘状況（北西から）



4. 東4区完掘状況



5. 調査区完掘状況（東から）



1. 調査区完掘状況（南東から）



2. 調査区完掘状況（北から）



11

SK10 (1/4)



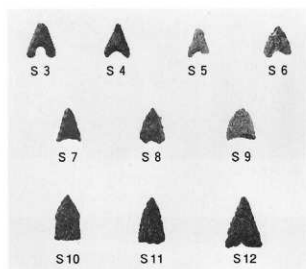
S 1

SK10



S 1

(1/2)



S 3

S 4

S 5

S 6

S 7

S 8

S 9

S 10

S 11

S 12

(1/2)

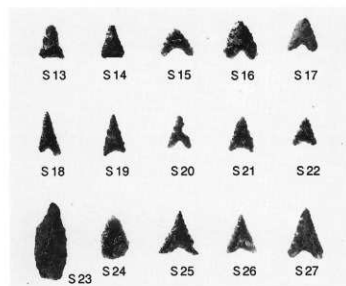


S 2



S 2

(30%)



S 13

S 14

S 15

S 16

S 17

S 18

S 19

S 20

S 21

S 22

S 23

S 24

S 25

S 26

S 27

(1/2)



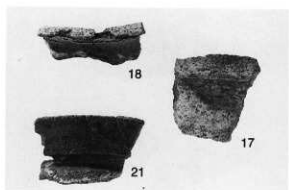
15

(1/2)



16

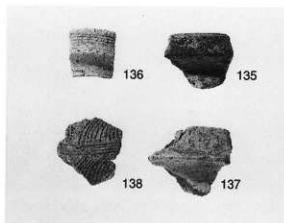
(1/2)



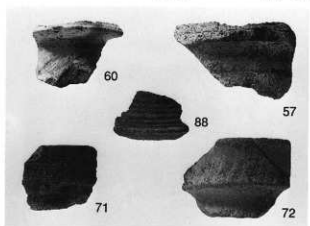
S I 01 (1/3)



S K 06 (1/3)



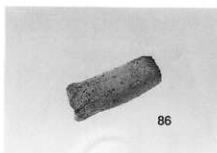
S D 14 (1/3)



S D 19 (1/3)



S D 19



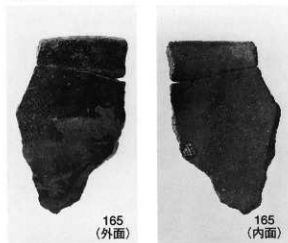
S D 19 (1/3)



S D 19



S D 19 (1/3)



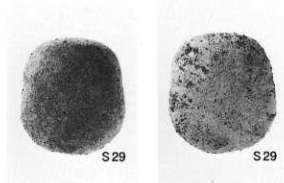
S D 26 (1/3)



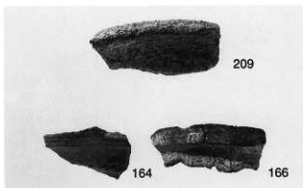
S D 30 (1/4)



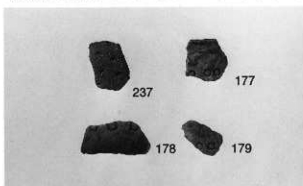
遺構外 (1/4)



S 105, 06, 07 (1/3)



遺構外 (209)、S D 26 (164)、S D 27 (166) (1/3)



S D 03 (237)、S D 40 (177, 178, 179) (1/3)



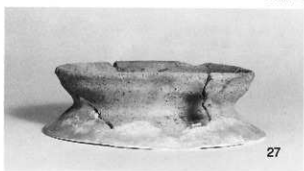
S 104 (1/4)



S 104 (1/3)



S 108 (1/4)



S 108 (1/4)



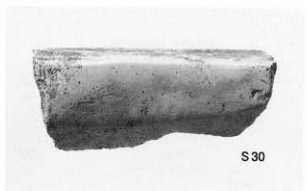
S 108 (1/4)



S 108 (1/4)



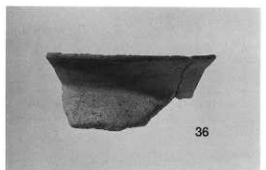
S 108 (1/3)



S 108 (1/3)



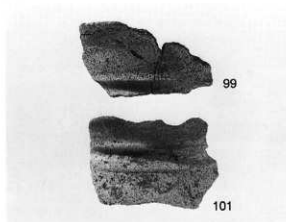
S 108



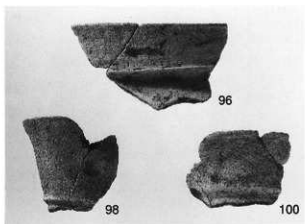
S 109 (1/4)



S 109 (1/4)



SD19 (1/3)



SD19 (1/3)



SD19



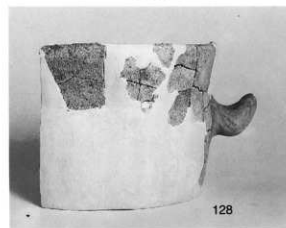
SD19



SD19



SD19 (1/4)



SD19



SD19



S D21 (1/4)



S D21 (1/4)



S D21 (1/3)



S D21 (1/4)



S D21 (1/3)



S D21 (1/3)



S D21 (1/4)





S D21 (1/3)



S D21



S D21 (1/3)



S D21 (1/2)



S D41 (1/3)



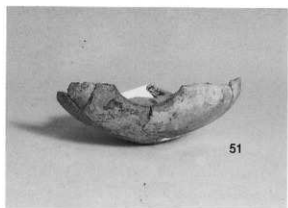
遺構外 (1/3)



S D41 (1/3)



S D41 (1/3)



S K 30 (1/3)



S K 30



S K 30 (1/3)



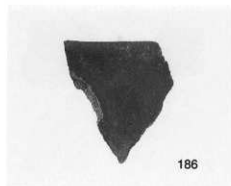
S K 30



S D 40 (1/3)



S D 40



S D 40 (1/3)



S D 40 (1/3)



199

S D 40 (1/3)



203

S D 40 (1/3)



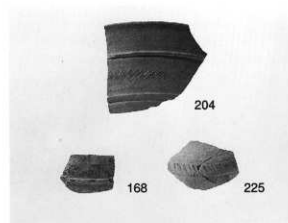
202

S D 40 (1/3)



205

S D 40



204

168

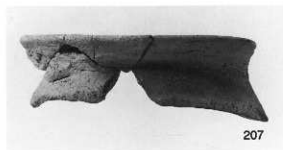
225

S D 40 (204)、S D 32 (168)、S D 02 (225) (1/3)



206

S D 40 (1/3)



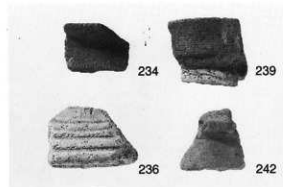
207

S D 40



245

S D 03 (1/3)



234

239

236

242

S D 03 (1/3)



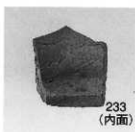
S D01 (1/3)



S D02 (1/3)

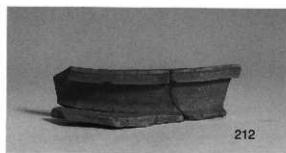


233  
(外面)



233  
(内面)

S D07 (1/3)



遺構外

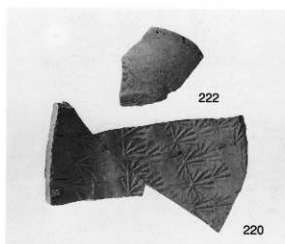


遺構外 (1/3)



219

S D01 (1/2)



222

220

S D01 (1/3)



211

遺構外 (1/3)



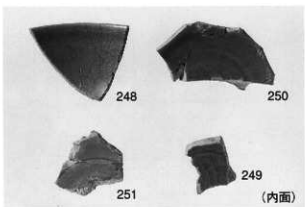
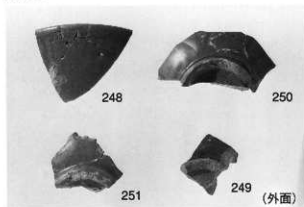
213

遺構外 (1/3)



215

遺構外 (1/3)



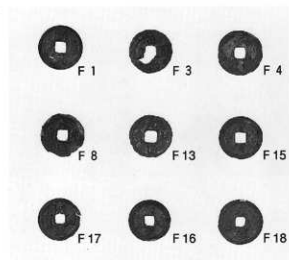
(1/3)



(1/2)

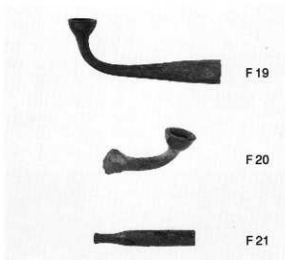


(1/2)

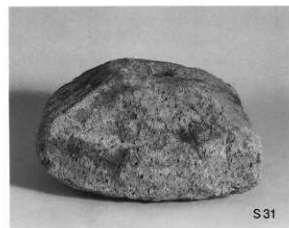


(1/2)

遺構外



(1/2)



遺構外

(1/5)



S K 11

(1/5)



1. 調査前全景 (南西上空から)



2. 1区・2区完掘状況 (南西から)



3. 3区 F29-F30土層断面 (南西から)



4. SD01完掘状況 (南から)



5. SD01遺物 (S20) 出土状況 (西から)



1. 10層出土遺物 (西から)



2. S K01完掘状況 (南から)



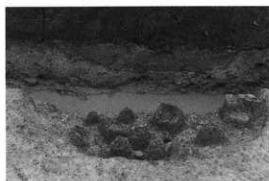
3. S K02検出状況 (南西から)



4. S K02遺物 (36) 出土状況 (南から)



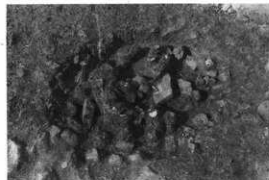
5. S K02完掘状況 (北から)



6. S K03半截・遺物出土状況 (西から)



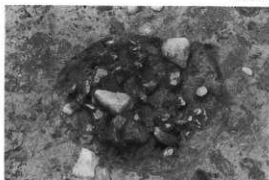
7. S K03完掘状況 (西から)



8. S K05遺物出土状況 (北東から)



1. S K04半截状況 (北西から)



2. S K04遺物出土状況 (北東から)



3. S K07・16検出状況 (北東から)



4. S K07完掘状況 (北東から)



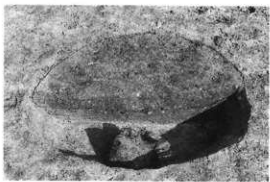
5. S D02・S K12・13・P27完掘状況 (南から)



6. 8層遺物出土状況 (北から)



7. 8層遺物出土状況 (南から)



8. S K13半截・遺物出土状況 (南から)





1. S K14検出状況 (北から)



2. S K14遺物 (347) 出土状況 (北から)



3. S K16遺物 (359) 出土状況 (東から)



4. S I01完掘状況 (南東から)



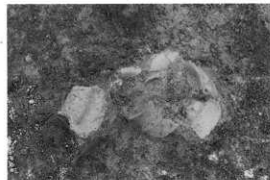
5. P48半載状況 (北から)



6. P48完掘状況 (北から)



7. 5層遺物 (396) 出土状況 (北から)



8. 5層遺物 (392) 出土状況 (北から)



1. SD04完掘状況 (北から)



2. SD05完掘状況 (北から)



3. SD05遺物 (409・415) 出土状況 (南から)



4. SD05遺物 (S134) 出土状況 (南から)



5. SD05土層断面 (南から)



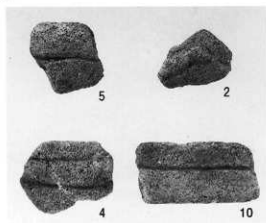
6. SX01完掘状況 (南から)



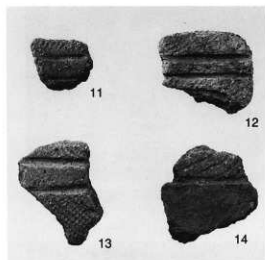
7. 3区調査風景 (南から)



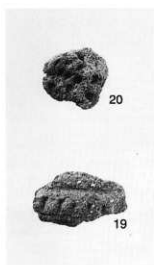
8. 調査参加者



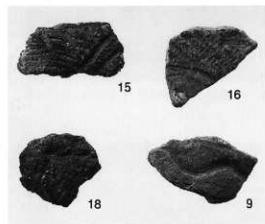
S D01



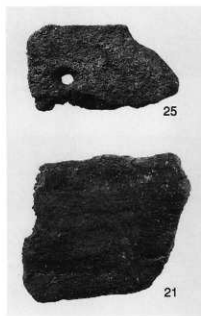
S D01



S D01



S D01



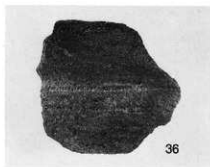
S D01



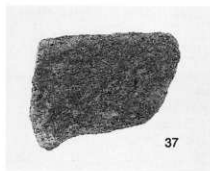
S K01



35



36



37

S K 02

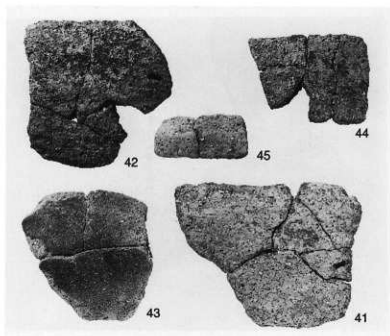


52

S K 07



49



42

45

44

43

41

S K 04



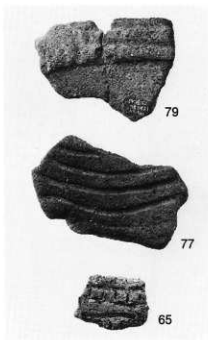
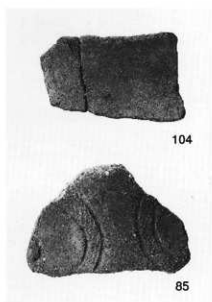
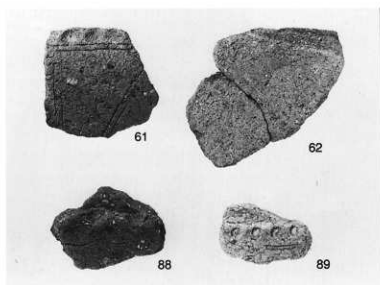
48

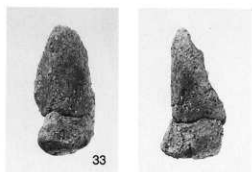
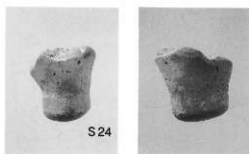
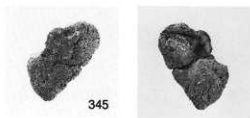
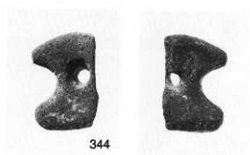
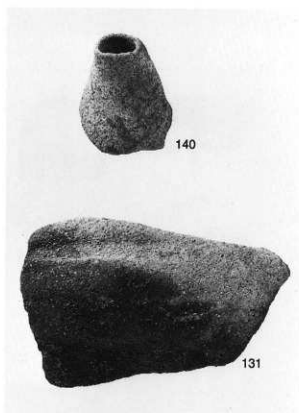
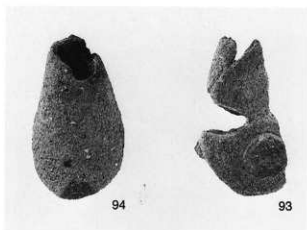
S K 05



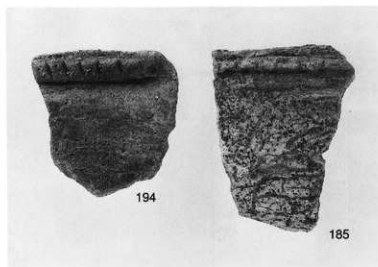
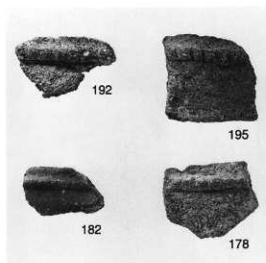
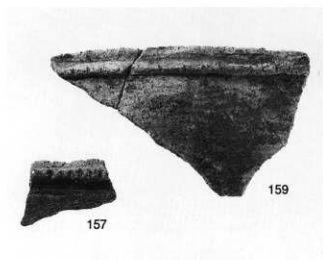
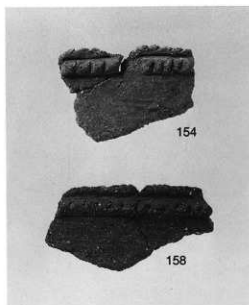
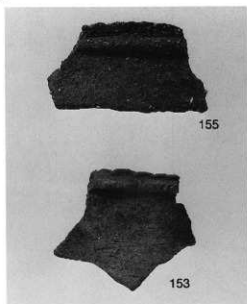
53

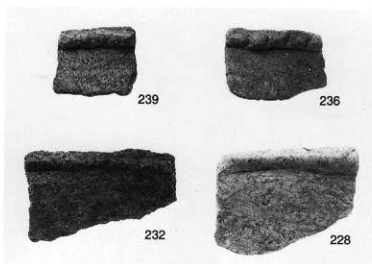
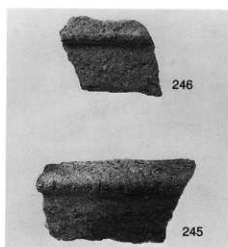
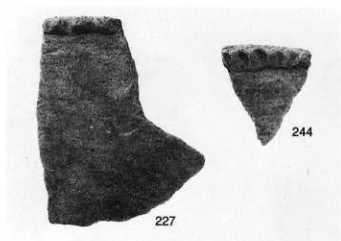
P 45



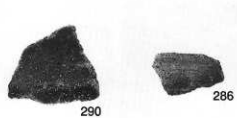
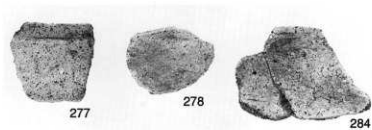
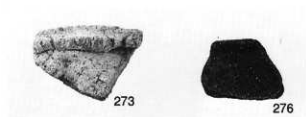


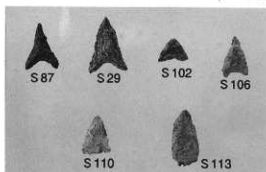
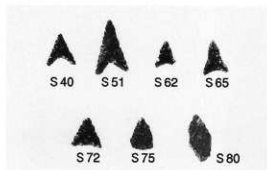
S D 01

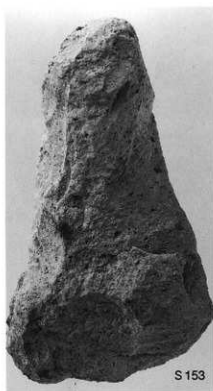














S 187



S 166



S 164



S 171



S 167



S 195

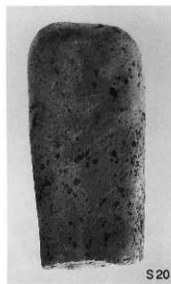
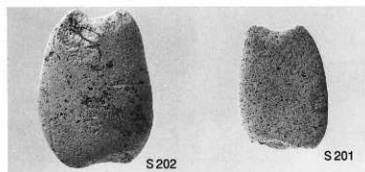
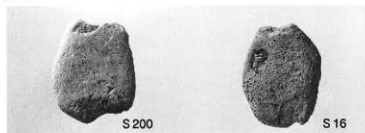


S 176



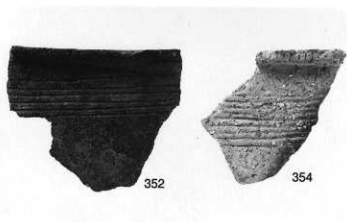
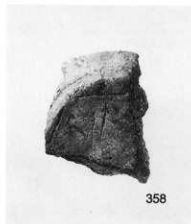
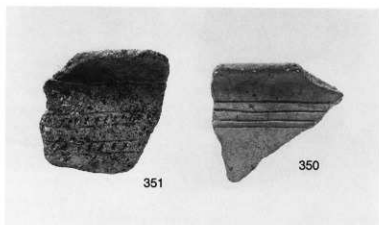
S 19

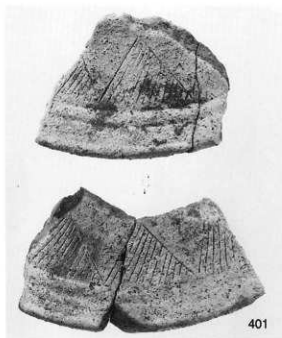
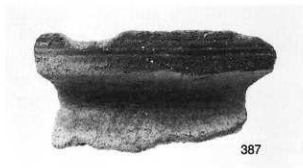
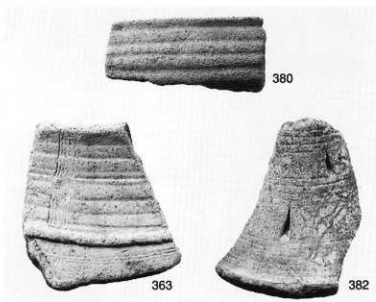
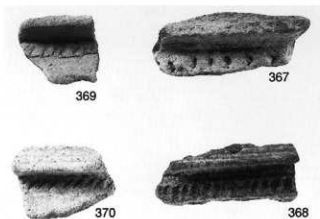
図版 42

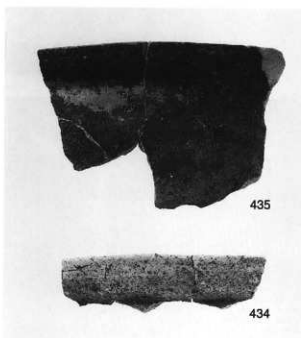
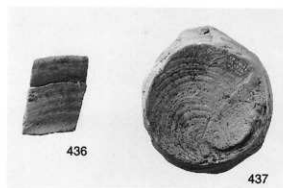
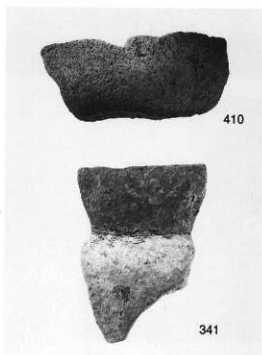
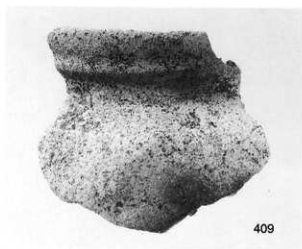




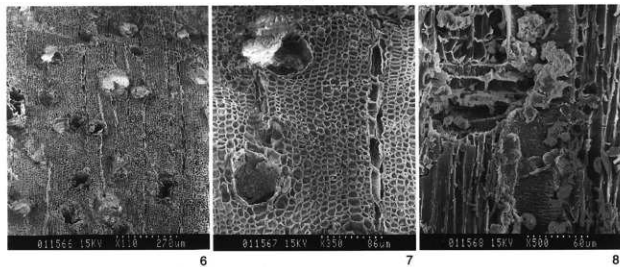
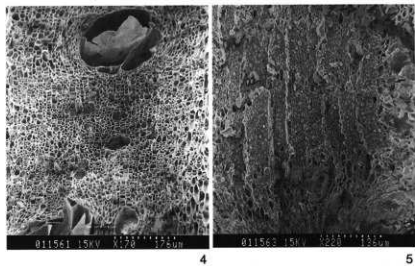
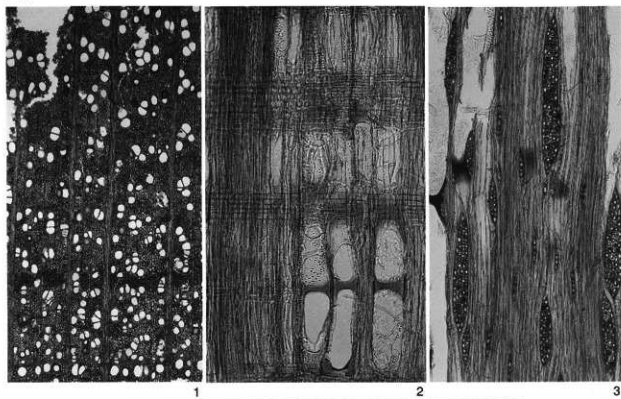
S K 14

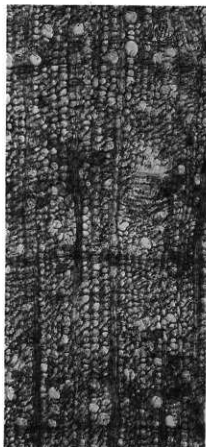












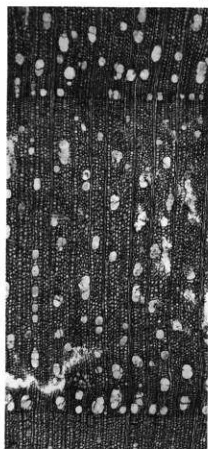
9



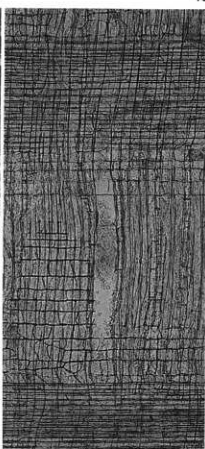
10



11



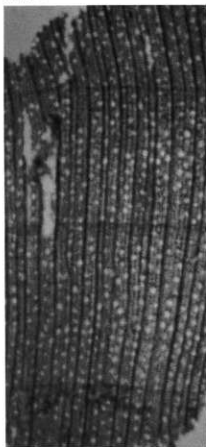
12



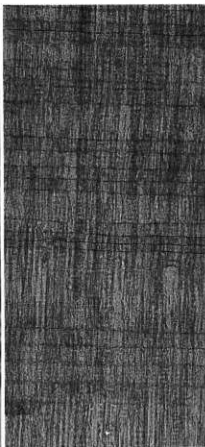
13



14



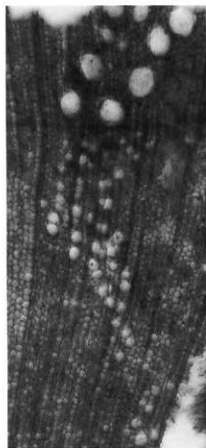
15



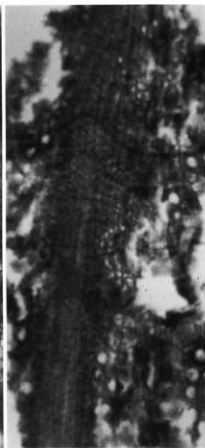
16



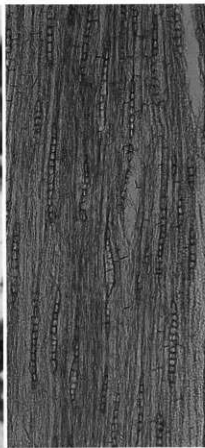
17



18



19



20



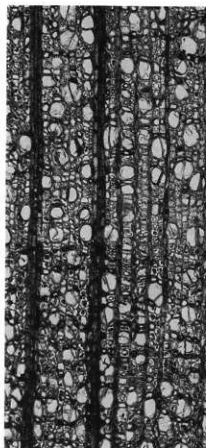
21



22



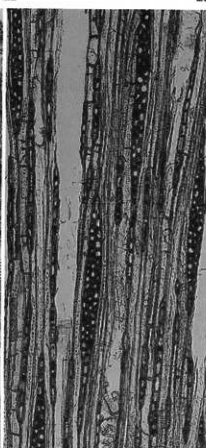
23



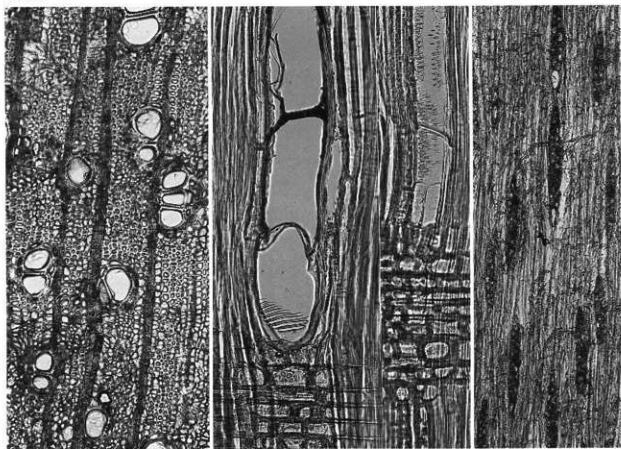
24



25



26



27

28

29



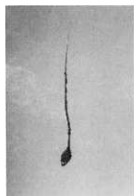
1 エゴノキ核  
—— 0.5mm



2 ハクウンボク核  
—— 0.5mm



3 イネ炭化果実  
—— 0.5mm



4 イヌビエ果実 (穎)  
—— 0.5mm



5 イヌビエ果実 (穎)  
—— 0.1mm



6 同左  
—— 0.1mm



7 不明  
—— 0.1mm



8 同左  
—— 0.1mm



1 コナラ属堅果 \_\_\_\_\_ 0.5mm



2 コナラ属炭化子葉 \_\_\_\_\_ 0.5mm



3 同左 \_\_\_\_\_ 0.5mm



4 ウメ核 \_\_\_\_\_ 0.5mm



5 モモ核 \_\_\_\_\_ 0.5mm



6 同左 \_\_\_\_\_ 0.5mm



7 モモ核 \_\_\_\_\_ 0.5mm



8 モモ核 \_\_\_\_\_ 0.5mm



9 同左 \_\_\_\_\_ 0.5mm

## 報告書抄録

ふりがな	ふるいちいせきぐん							
書名	古市遺跡群1							
副書名	一般国道180号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	59							
編著者名	中森 祥、濱田竜彦、家塚英詞、濱 隆造、吉田 学、内田浩文							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260 Tel. 0857-27-6711							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古市カハラケ田遺跡	米子市古市 字カハラケ田	31202	2-642	35度 23分 20秒	133度 20分 00秒	19980408 ～ 19981111	12.868m	道路改良 工事に伴 う調査
古市河原田遺跡	米子市古市 字河原田	31202	2-643	35度 23分 10秒	133度 20分 00秒	19980408 ～ 19981111	10.948m	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
古市カハラケ田遺跡	集落跡 散布地	縄文時代 ～ 中世	竪穴住居跡 9 掘立柱建物跡 15 土坑状遺構 24 溝状遺構 34 ピット 615	縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器 中近世陶磁器 木製品・自然遺物 土製品・石製品 金属製品				
古市河原田遺跡	集落跡	縄文時代 ～ 中世	竪穴住居跡 1 土坑状遺構 16 溝状遺構 5 ピット 48	縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器 中近世陶磁器 土製品・石製品 金属製品			縄文時代の 土偶	

鳥取県教育文化財団調査報告書 59

一般国道180号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I

鳥取県米子市

## 古市遺跡群 1

古市カハラケ田遺跡

古市河原田遺跡

発行 1999年3月31日

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

〒680-0011 鳥取県東町1丁目271番地

電話 (0857) 26-8397

印刷 (有) 米子プリント社

鳥取県米子市旗ヶ崎2218

電話 (0859) 22-2155